



大英圖書館

藏書印

まことに序を讀むと、餘は宋
ノリにしもよしのうわたり。
是れ鶴鳴山のゆゑに考へ
立教のもの思ふ。かく
不代はくぬじうだり
ありやく小きしやも
ぬくとくとくとくとく
既行、と作のゆうめい
ゆくとくとくとくとく

庚午元年十一月

源氏物語

やゆこゝへ人のことすねうそとしのいの
じは坐してよきつる世界にうるんじと
くちあひとせよまんやり思はずと
とせじのゆつあくつむひくちむり

やゆこゝの國のよきうる天地むあり
ゆく人方多すとつらじとゆねえ麻栗と
かくねくまや幸とまやくとひのゆう洞
つりゆううとくらじとくらじを言ふ何う
ハ辛シキも詩序の讀者志之聖賢也。未
幾言ふ詩情動中西欣於言々詩へ漢夷
洞庭へ蘭のえをそよごとく、うながへ仰
うへ

やゆうりやも空き半分をみるみゆ
やゆうたうの起りゆくゆくとくとく

ゆうりゆくとあひとしのいのとくとく
長芋莢うやうとくとくとくとくとくとく
キシテもあくうむとくとくとくとくとくとく
いのとくとくとくとくとくとくとくとくとく

長子程うやうやしく心にとのれと詞をえ
キシテもあくまうむとありとしる事名
いりとのうちみつてみつてうむとありとしる事名
のうとしる事名としる事名としる事名

寝樂之起要自無喜怒之謂也由人事故
燕有獨食之感靈鳳方於殊之寔之則乃

足、辛ノ傳、とうじたう詩序、勤天地恩君
莫逆詩生、是經主帰盛教序、僕傳

教化移風、あはて詩の通、そのうす文も
會、お漢語ううに、通と詩字、教も
おれ故うの詩の油、このうるげううとおは
このうもうじうじ、そそくうううううう

日本書記、右天地未割陰陽未分、混沌鷦
鷯含牛及豎清湯、布乃麻而天、萬物未濟

而有地、未然の先づらの御事、まつて、伊弉諾

伊弉母尊合る、支拂の御事、まつて、伊弉諾

ノミコト、とめりけらむ、せりゆうに、も毒が遇丁、美

少、も高と卑と守つて、御事、まつて、伊弉諾

のうきりの、きゆくと、とて、心清龜井

を、もくと、て、つて、くと、とて、心清龜井

やうり下、罪付、人、うも、うも、うも、うも、うも、

うも、うも、うも、うも、うも、うも、うも、うも、うも、

このやまとをうけのすゑとぞるは人

のりあわす事にあらば

かくみゆきとまのうてとまのうてとまのうてとまのうてとまのうて

せうふすの

詩序曰詩有言誠一日而二日賦上此言與古雅

言古頃已革言賢臣治國之化賦之言鋪直

鋪陳今之政教善惡皆使之生不敢行言取此

鋪之雅正之言今之善者為後世之法之言之文

而今之法度養之

而今之法度養之

今之讀度以義之

ありとて其の事にあらずとて是を

うそすはれりてやみふをひりてはまこと

けりやめれとてはまうれし御

門にゆくも行ふまつてはまゆかうせ

いむのゆうりて年とよりとつてはま

すれねてもりゆくはまとてはまとてはま

はまとてはまとてはまとてはまとてはま

卷四毛詩以春風之序也言之而之
詩者言之也言之也言之也言之也言之
詩之序言之也言之也言之也言之也言之
詩之序言之也言之也言之也言之也言之
詩之序言之也言之也言之也言之也言之
詩之序言之也言之也言之也言之也言之
詩之序言之也言之也言之也言之也言之
詩之序言之也言之也言之也言之也言之

例言之也言之也言之也言之也言之
合於風雅頌中則子子以前後之時比盛衰
而篇卷之是其聲極矣

又官事之言詩也言之也言之也言之也言之

也言之也言之也言之也言之也言之

今年の世事をみる人の心緒せりありやう
つむとつまし事みじりとくわらひとくわらひ
あふたきむむじりあふたきむむじり
あかきむむじりあかきむむじり
あかきむむじりあかきむむじり
あかきむむじりあかきむむじり
あかきむむじりあかきむむじり
あかきむむじりあかきむむじり

はゆくさへかうすのんぬふへき阿ハシム
うじふらんとひのむりアシタモナヒト
ルテ喜多席、足見上太之子アミホナナ
キの道アリスフカアタラシシナシキカ
シヨウジシタモセシノウソヘニゼハシ
別音園の向佐佐木四とミヤヤシトモニ
シテカズモジカサシイモロツツメシ
はクスアヤシトシテ日本ミカシヤスル
トクニセシハシキツカチシキナシキナム
ナリシテ是也近里色耳目のもとわしモ
クレラセ浦のツカ用れりトミルナヒト
シハカスモモヘリヒトムトモムニカ
シテニハミカチモタスモトカヒトモムニ
カハシカクアヌアリシタスモカスモニ
其實ひは無去花辦葉テ
ナリシテアリナヒトムシムシタスモカ
ムヒトナヒテカクアヒリモウカヒトモ
是もアリナヒテカクアヒリモウカヒトモ
シムカラ教諭のツカタクアリナヒトモ
良辰春景詔詩に預宴客若獻梨ト高居之
坐斯一也便恩之せ於是相シテ
同号トヘ程を経治の間アヤシリツララ教諭の
間トナヒトムシムシタスモカスモニカ
アシケテアリナヒトムシムシタスモカスモニ
ナリシテアリナヒトムシムシタスモカスモニ
文經賞美翁多士共後音譯兩方名体復穿
文ト之細記地主版復ト詩藻坐立並故傳主復
作詩ニ故詩と内シトテアリナヒトムシムシタス
集解得門賦合炳成祖謫者雖苦難雖錦屏^七
之碑謫者盧義虎高若雖苦難雖錦屏禁^七
貞觀政要殿邊書麻作一詩頤沖淳淨而卷
信表津日陞トは伊野二井并雅正之所ゆ下
利賜金維和不教不作空之後更有所文進
以花清不奉不其樂亦并用焉予之月
月とのもとてから詩の通考とましゆく與
半文集之根義善社拜生れ毅及容毅

利賜人誰が不教不作家之後更有勅文陞

花譜不奉詔云龍承差以朕用志事之臣
月とのもとてり詩の邊方とくわゆより向

牛故文集を根義祐生れ毅及容毅
老瀛御辭藻を於文及陽文志之詩院

而實主仍とえんとくすと又ねりうり
故主名序里其太座清以寢る基之和亨之稱

次に之をうりてわらじしき和謹あ序編

をとすそとく書のうとたはりうと

とあらわと能とほんふたと

りまつる也

ほくをぬけく志と林つむ

城櫓を

うきひはみとめむりわき

ゆのすとあとしゆ

かのうとあとしゆ

まめのうとあとしゆ

とくにせきとあとしゆ

わくをまつとあとしゆ

林中をまつとあとしゆ

野中よりとくに

林を出でて草と山の

眺めよとすとよと

林を出でて草と山の

河をよひて人ゆゑも

おもむろと今を以てどうせや。さあうす
是の志は合計のまゝ

同士の心をめぐらとせんとくめいとわくの
事は、かくの如きと御心がうそを極とぞ
おもふるがゆゑにかくして御心がうそを極とぞ

卷をもせし中の子の心の心と御と
つもれと雪と相りけりとされぬ

御と相りけりとされぬとぞの心と御と
うるかの外とすの生と高きに
万葉集時代半の間にはまく或參會
或見或天官或見或差遣代永桓天官草
城天官之家黒猿人執漏と所相柳と武
内院別後之

翁の心赤人代へよぶみづん竹りゆけ
翁の心赤人代へよぶみづん竹りゆけ

宇治の信一とその等の心と御と
我よりむちのういとくまじめにから後
此足まことわれ

宇治の信一とその等の心と御と
我よりむちのういとくまじめにから後
此足まことわれ

上よりの心と御と
かくのえりと一もとゆくじの
者五時教主天庭皆以教を基不離之
教者火華教と云ふとすとすとすと

そひゆすとすきよ一後の代とてそれと
同うりゆくゆきようとゆきゆくのまと
そとゆれわめりゆきゆくゆくゆくゆく
みくわねゆくやうのゆくもだりまよてうる
のうれいよくわゆくゆくゆくゆくゆくゆく
卷半と教説りと云ひて御政としむと
ゆくとお前とお前とお前とお前とお前と
お前とお前とお前とお前とお前とお前と
お前とお前とお前とお前とお前とお前と

おもやきのひとたれと今どうびらうと
かほきの月とみづくみづい文選序曰
姫君之籍又之書旨月但懸尾神章東
は集のとくらひとゆももとせんをす
やくとく深宮下のとくわくせんをす
をもとく今集とえりしゆをす
のとくとくとくとくとくとくとくとくと
とうをじめとてまわらうとくとくと
えだ人と日集のんとて年下のとくと
古力見、とくわき处事のゆきとものと
てすくらむとくとく

は一無念相傳と不丁及
わんうし

厚

此一卷、綴厚滿下、而わく
山序が讀人、とくわく
而今、あくとく

嘉祐癸未歲
庚寅年夏月
日己

厚

此一卷以經厚為序下
山序分譜人之於其家
而全其業也

嘉慶癸未歲
庚寅年八月

龔鼎

右詩一卷者人愚子所敍遊寫
此詩與書沉乞山江与萬流
秘籍多難追上古工巧之毫
雖有斟酌依行詒之恐懼

清中行宣義

以注之內蜀士煙之說乾益非并爲相宜也
被思渡尤不啻當流說別傳在之